針葉樹会報

1982 .12. 第62号

表紙写真説明

北鎌尾根にて

1978．1 月

撮影　金　子　晴　彦

目　次

〃来年は満八十歳です〃という話……吉沢　一郎　1

もうひとつの「野麦峠」……増山清太郎　3

林　俊介さんを偲んで……柿原　謙一　6

赤谷川本谷溯行……前神　直樹　9

ボチボチ山登りしましょか……中西　茂　11

会務報告……13

発行日
1982年12月7日
発行所
針葉樹会
印刷所
東京和光印刷

針葉樹会報
第62号

編集人
〒177 東京都練馬区東大泉
2−5−25
小林修

連載・山岳部年代記ー心に残る山行ー（1）

〃来年は満八十歳です〃という話

吉沢一郎

ひとと競争して勝ち負けや等級を決められたりするのは性分に合わず、専ら自分のペースによって自由に歩けばよいというところで入ってしまって、それを長く続けたというのが私の山登りということになる。だから私が何か書いたところで別に、日本の山岳思想史の解明などに凡んど役立たないことは、前記のような簡単な動機で山に入ったのだということを念頭に入れれば、充分納得がいくことと思う。

この頃ひとに年を聞かれると私は、来年は満八十歳です、と答えることにしている。七十九歳などというのは中途半端で頭に入りにくかろうと思うからである。

死亡者の年令別統計グラフなんていうものを私は見た覚えがないしそんな統計は意味がないのかも知れないが、よく考えてみると、率或いは数で出してみたところで、多いのか少ないのか解らなくなるからであろう。

いずれにしろ八十歳ともなれば、社会の高齢化に一役買っていることだけは確かで、そんな私としては色々お世話や御心配をかけていて相済みませんというより仕方がない。今となってこんなことを書けるのも山岳部のお蔭なんだから、一応感謝しておくべきなのかも知れない。長生きしたいと思うなら（私はそうは思っていない、もう沢山だ）山岳部に入ってのんびりと山と仲間に親しむべきであろう。しかしこんな世知辛い世の中になっていては、今のお気の毒な学生諸君にこんなことを言ってみても無意味かも。

それにしても私ほど山からいろいろの恩恵を受けている者は余りおるまい。その意味で私は関東大震災の一年前に一橋と山岳部を選んだことを、最も賢明な決断だったと思っている。

学校を出てからももう五十年以上になる。明治、大正、昭和と生き――ではない――生かしてもらいながら、何とはなしに今日まで来てしまったが、何といっても私の黄金時代は、山と積極的に取組むことの出来た、古きよき時代の一橋時代を中心としたものであろう。

アインシュタイン博士と奥さんと福田徳三博士のお尻にくっついて少し歩いたのもその頃であった。

あの公孫樹の樹の下で過した予科の三年と放浪の本科三年、しめて六年の間は、山と良き仲間との楽しい憶い出に満ちた黄金の年月であった。今も尚、山と仲間との良き関係は続いているが、その内容は少しづつ違って来ているようだ。山は低くなったが、交遊の範囲はずっと広くなっている。

一九七七年に行なわれた日本K2登山隊の総指揮ということでバルトロ氷河を遡り、ゴドウィン氷河に入った時は、単純計算で七四才ということになるが、目方が三八キロになって三ヶ月後に帰国してから、私自身にも遂に老化現象が少しづつ進行し始めていることを薄々と感じてきた。それでも、

一九七七（昭52）メキシコ出張（国際山岳連盟総会出席）
一九七八（昭53）栗駒山、鬼面山、箕輪山
一九七九（昭54）笠ケ岳
一九八〇（昭55）飯豊山、夜叉ケ丸、能郷白山「山へ」出版
一九八一（昭56）早池峰、甲子山、鳥海山、安達太良山、燧岳一周、金時山、大山（鳥取）
一九八二（昭57）石巻山（愛知）、森吉山（秋田）、茶臼岳（那須）、難台山（茨城）、東大嶺（吾妻）、恵那山（一〇月）

K2から戻ると早速、文芸春秋社から回想的自伝「山へ」の出版話が出てきた。途中からH氏の叱咤激励を受け、やっとのことで一九八〇年八月末に発刊の運びとなった。始めは大部分売残るんではないかと心配していたが、一年経って第二版が出ることになり、実は驚いてしまった訳である。

この本には笠ケ岳の登山までが含まれているが、それから以後のものは秋田県の森吉山以外、公けにも小やけにも発表したことがない。

セフティ・ベルトを用意して登山に行くようになったのは笠ケ岳の時から始まったといってよかろう。まるで猿廻しの猿のような格好で山の中、或いは里近くを歩いている図は、余り立派な眺めではない。撮られた写真をみればよくわかる。この姿は自分ながらわびしい限り。

しかし最近とみに老化が進み、どうやら反射神経の衰えと、バランス感覚の減退を感じるようになってきた。普通の平らな山道でも安心は出来ない。草臥れてくればそれは一層劇しくなる。がそれでも自分の心のうちにある山へは、いつかは行ってみたいのである。

何処へ行っても、男性・女性の区別なく、同じようにこちらが恐縮するほどに労わってくれる。今となっては私のペースも衰えて、若い人の二倍はかかる。だから日が短くなると最後はいつもライトの御厄介になってしまう。ガードメンには気の毒だがこれもまた止むを得まい。地方の若い人たちのもつ思いやりの心、これには全く感心するし、本当にいくら感謝してもしきれないほどの温かさを感じるのである。これも来年は八十才ということとからくる余徳かも知れない。有難いことである。

× × ×

ここまでやっと書いてきて息が切れてしま

った。が、それでも編集長の希望枚数の半分にも達していない。細川隆元や竹村健一の真似をして（但し告訴に至らない程度の）「山岳時事放談」ものならまだ幾らか書くことはあるが、一橋の紳士淑女？諸君に対して、そんなことを御披露してみてもはじまるまい。今回はこの辺のところで御勘弁を、ということにしておきたい。

もう一つの「野麦峠」

増山　清太郎

大島亮吉が、荒船と神津牧場附近を、世に紹介したのは一九二五年のことである。彼が二十八歳の命を涸沢に捧げたのは一九二八年三月で、その時筆者は十七歳の少年であった。

田部重治著「日本アルプスと秩父巡礼」は当時既に希購書の列に入っていたが、増補版ともいうべき「山と渓谷」が、山岳、渓谷、深林の間に放浪した過去二十年の記録として、刊行されたのは翌二九年六月であった。

そのころ、低山趣味というものが存在して、「霧の旅」が代表格であったが、この人達には興味を感じなかった。しかし、田部・大島の二先覚が、ともに高原や山村の放浪者であることを知ったとき、私達がその影響を受けるのは、必然の道筋であった。

二八年夏の上高地合宿中に、勝田一郎君と二人で焼岳に登ったところ、それまでに登ってきた山山とはまるで違った、如何にものんびりした山が、雪を点点と残して、横たわっているのが眺められた。「あれに行こうじゃないか」と、二人は翌朝早く出発して乗鞍岳を目指した。途中で道を間違えて平湯に下ってしまった。

「いい景色だね」

「外国みたいだね」

二人は短い会話を残したまま、後も見ずに乗鞍へ急いだ。後に、ウェストンが、平湯の景観がスイスに似ていると述べているのを読んで、（注一）私達の感覚が必ずしも誤っているものでない事を知った。

これが飛騨に入った最初の旅であった。それ以後、涸沢や上高地の合宿を終えると、十円を懐に飛騨の山野を放浪する、癖がついてしまった。社会人になってからは、飛騨の山旅そのものを目指して、東京を離れることも多くなった。

二年上級の磯野計蔵君も飛騨を愛する人であった。彼の影響も否定出来ない。

こんな風にして、或る年の夏の終る頃、乗鞍岳から野麦の里に下った。村の入口から七十がらみの老人と道連れになって行くうちに、大きな荷物を背負った婦人に出会った。老人は「どこへ行きなさる、おにばあさのような姿で」と声をかけて通りすぎて行った。

その夜、民宿の炉端で、再びこの老人に会ったので「おにばあさ」の説明を求めたところ、次のような興味深い話を披露してくれた。

明治の中期、野麦の村で隠居した老夫婦が、峠の小屋番になった。爺さんはやがて

死んだが、婆さんはひとりで二十余年も峠を守って、いろいろの話題を残した。

まず彼女は、女性に相違なかったが、体駆偉大、容貌怪偉で、鬼婆の渾名で呼ばれた。大変な力持ちで、大荷物を背に峠道を往来したので、さっきのような挨拶が生れたという。

気の強いことは無類で、爺さんが死んだ後に、小屋に二人組の強盗が押し入った。鬼婆は二人をジロリと睨んで、スタスタと小屋の背後に廻り、乗鞍岳に向って叫んだ。「爺さんや、強盗が銭を欲しいと言ってるから、たんと持って帰ってくんろ。」強盗は婆さん一人に辟易していた上に、爺いにまで出られたらどうなることかと、コソコソと逃げてしまった。

記憶力が鋭く、一度でもこの峠を越した人の顔は、何年でも覚えていた。

そして彼女は、弱者の味方であった。彼女の小屋で暖い席を与えられるのは、子連れの婦人や旅芸人などで、肩で風切る官員様は炉端から遠ざけられた。

しかし、彼女の名を今日に残したのは、こんなつまらぬ話の故でない。彼女は行倒れを介抱する名人だったのである。峠は、信濃側は雪が深く、飛騨側は岩角が乗鞍おろしに吹きさらされているから、冬場は行倒れが多い。行倒れが見付かると、まづ婆さんに急が告げられる。八十才を越した老婆にとって、人一人を峠まで背負い上げるのは容易なことではなかったが、彼女はそれをやってのけ、人工呼吸をしたり、自身の体温で温めたり、ぬるい味噌汁を飲ませたりして、生き返らせた。彼女が峠を守っているかぎり、凍死人はなかった。

或る冬、吹雪が数日続いた後、はじめて峠を越した旅人が、炉端にひとり大往生を遂げた彼女を見た。

ざっとこんな話だったが、同席していたもう一人の老人も「おっかない面をしたばばあったのう」と和した。

一八九八年に木曽路を旅した小島烏水がこの老婆の噂を聞いて、（注二）「凍死に垂んとする旅人を介抱するに慣れたる志篤き一軒茶屋の媼ありて……」と書いているから、この話の少くとも核心部分は事実だったに相違ない。この時、婆さんの峠に、興味をそそられたことは勿論であるが、日程の都合で割愛し、御岳の岳の湯の方へ行った。

婆さんの話を聞いた数年後の初冬、信濃側から野麦峠に差しかった。峠には一人の爺さんが小屋番をしていた。この頃には峠を越える旅人も稀れになっていたので、人を懐しがって、泊って行けと勧める。境地も雄大で、いい環境なので泊ることにしたが、小屋には布団が無い。数日前に盗まれたので、爺さんはこの日、信州の大野川で名の知れた失せ物探しの巫子の所に教えを請いに行って、今しがた帰ってきたばかりであった。巫子は「布団は東の麓にある」と宣うた由である。これは至極あたりまえの結論にすぎない。何故なら、小屋の汚い布団は運賃負担力を持たないから、近所にあるに違いない。峠の北は乗鞍、南は御岳、西には爺さんの家があるのだから、布団の行き先は麓にきまっているのである。

この巫子の存在についても確証がある。一九二八年三月、中島嘉一郎、手塚晴雄、磯野計蔵、金田一郎の諸君が乗鞍岳に登った。その頃は冷泉小屋が無くて、番所の少し先の金山平という処に散在する蕎麦耕作用の小屋のうち、よさそうなものに泊っていて、天候を見て登頂するのであったが、小屋に滞在中に時計が一個紛失した。同行していた人夫が心配して、わざわざ大野川まで下って件の巫子に占はせたところ、「人の尋ねた所にある」という返事であった。果して時計は何度も探した炉の灰の中から出現したそうであるが、（注三）これもあたりまえの話で、狭い小屋の中では、人の尋ねた所以外の場所はあり得ないのであった。巫子の実力はこの程度であるが、土地では案外の信用を得ているらしかった。

話はもとに戻って、野麦峠の一夜、小屋番から精一杯の歓待を受けた。彼はパンというものを食べたことがなかったので、私の取出す貧しい食物も、彼にとってはご馳走であった。私に振舞はれたのは例の漬物や、地蜂の蜜などであった。私はそれから十三曲峠――これは陸地測量部の命名だろう、実際は無名の峠――を越して御岳山麓の開田村の方へ出た。

一九三九年二月、村尾金二、渡辺九郎、新羅二郎の諸君と、木曽御岳に登った。黒沢口の里宮の所で車を捨て、しばらく行くと右手に乗鞍岳から野麦峠一帯――峠そのものは見えなかったが――が眺められた。通りがかりの爺さんに、「あの山は何というのですか」と聞いてみたら、「飛騨の乗鞍山（のりくらさん）じゃ」という答が返ってきた。この辺では乗鞍は飛騨の山ということになっているのであろうか。

そういえば、槍もかつては「飛州槍ケ岳」であったし、日本アルプスの命名者ウイリアム・ガウランドも、或いは陸地測量部も、はじめは飛騨側から入ったことは周知のことである。

その後信濃側に鉄道が通じたり、東京に顔を向けている等のことから、東側がアルプスの正面のような感じになったのであろう。

一九二〇年代に松本平の各地小学校長を歴任した岡村千馬太（注四）が筆者に語ったところでは、日本アルプスという名称が普遍化する前には、一般にはあの山波を、単に「だけ」と呼んでいたということである。

注一、Playground of the Far East. p172

注二、山水無尽蔵、一九六頁

注三、針葉樹五号　四一頁

注四、岡村の人柄については、安倍能成著「岩波茂雄伝」四四六頁等参照

今号より連載にて各年代の山岳部員の心に残る山行を単に山行記録にとどまることなく心の記録としてつづって頂きます。

集成すれば

「一橋山岳思想史」ともなりましょう。

（編集子）

林　俊介さんを悼んで

柿原　謙一

亡き会員林俊介さんのことをいつかは書かねば、と心ぎめしてから久しい。

昭和十二年に卒業した山岳部員は、林俊介・新羅二郎・松浦静雄と私の四名であったが、三人はすでに故人となり、残るは私だけで、私はとくに林さんと親しく、部報「針葉樹」第八号出版の時には、林さんの自宅に夜おそくまでお邪魔した記憶がある。

その林君は昭和二十年七月十日に、パラオ島の西南ソンソル島で戦死されていた。私は昭和二十一年四月に中支から復員したあと、このことを知った。やんぬる哉である。新羅君は林君より一ケ月前に、比島で戦死されていたのであった。

林　俊介　氏
昭和１０年１０月２１日
千曲川源流のモウキ磧にて

山岳部員時代に林さんとともにした山行は、十回ぐらいだったと思うが、錦繡の千曲川源流をつめて三宝山に這いあがり、甲武信・雁坂・黒岩尾根を歩いた旅や、苗場山神楽峰スキー行など、とくに印象に残っている。

その頃の私たちは登山のおり、よく古ソフト帽をかむった。私の父のお古は、私の頭にあわない。すると彼は、父君がイタリー旅行のとき求めて、既に古くなったソフト帽を、「小さい穴があいてるが、サイズがあうなら」と贈ってくれた。ぴったりである。爾来私はこのソフト帽を、昭和五十年八月二日まで山行のたびによく使用してきた。

卒業した林君は、先輩の中川孫さんがいる浅野セメント㈱（現在の日本セメント㈱）に入社し、ほどなく函館勤務となって北海道に赴任された。北海道のスキーや登山を楽しんだのは、この頃のよしである。

やがて昭和十八年一月太平洋戦争中応召され、三月渡満。近眼の度の強い彼が、歩兵部隊勤務となったのに、私は驚いた。そして二年と六ケ月たって、林君は南海の孤島で若い生涯を終ってしまった。いづれ内地に帰れる日がきたら、北アルプスや奥秩父の山に登りたい、と念願していただろうに。私は彼の遺品となってしまったボルサリノの古ソフトを、にぎりしめざるをえなかった。これを戦后長きにわたって使っていたのも、林君よ一緒に登らうや、という私の感傷によるものであった。

そのソフト帽も、年月の経過とともに、汗や山雨であせてきて、破れもしてきた。もういづれ山ぶところに納めねば、と私は思った。そのとき、私はまだ彼の若い登魂を鎮めてい

ないことに思いあたった。遺品をうめるのは奥秩父の東沢源流か十文字峠にと思ったが、戦后の原生林皆伐の姿を見ると、そこも不安がある。北アルプスか南アルプスのケルンの中に納めて、鎮魂の念を捧げようとも思った。そのうちに山田（亮）さんや私の長男が、いいところがあるという。黒部源流だという。薬師沢左俣と黒部本流と赤木沢がとりかこむ大きな台地、そこが良いといわれた。

昭和五十年八月二日、一行とともに私はその地をたずね、這松をこいで台上に立った。小岩や砂利だけの小天地がある。北アルプスのド真中である。よしここだ。私は山田さんとともに小ケルンを積む。その下には遺品である古ソフトを納め、林君の登魂ここにとこしなえに鎮まられんことを、と祈った。

その夜は銀河と満天の星空。黒部源流の草原は露にぬれた。流れ星がひとつ、黒部にむかって流れた。

―昭57・5・1―

林俊介君山行譜

昭和六年（十九才）

四　月　（東京商科大学予科入学）
六　月　木曽駒ケ岳

昭和七年（二十才）

一　月　関・燕温泉スキー行
四　月　富士山
七　月　野尻湖畔天幕生活
七～八月　扉峠・蓼科牧場

昭和八年（二十一才）

一　月　霧ケ峰スキー行
五　月　谷川岳
九　月　尾瀬と銀山平
十　月　雁坂峠・十文字峠・信州峠
十二月　五色スキー合宿（一月三日まで）

昭和九年（二十二才）

一　月　谷川スキー行
一　月　日光湯本温泉スキー行
四　月　湯沢温泉スキー行
四　月　飯豊山
五　月　榛名山
五　月　谷川岳
六　月　武尊山
六　月　白峯三山峰・信州峠
十・月　釜沢・金峰・信州峠
十一月　甲斐駒ケ岳・仙丈岳・赤薙沢
十一月　比叡山　（単独）
十一月　（鈴鹿）湯ノ山越え　（単独）
十二月　神津牧場・荒船山
十二月　関・燕スキー行

昭和十年（二十三才）

一　月　霧ケ峰スキー行（先輩・学生懇親スキー行）
三～四月　苗場山
四　月　三頭山・御前山
五　月　谷川岳
六　月　後立山縦走（単独行、牛首の登りでスリップ、細野に降る）
七　月　唐松岳・白馬岳（唐松小屋より大黒ノ洞に降り、メガネと登山袋を回収す）（単独）
七　月　大岳山
八～九月　剣岳より立山・薬師岳・薬師沢・

有峰

十　月　千曲川源流より甲武信ケ岳

十～十一月　鳳凰山地蔵岳

昭和十一年（二十四才）

四　月　苗場山神楽峰スキー行

七　月　涸沢合宿

七　月　上高地合宿

八　月　栂峠・二子山

昭和十二年（二十五才）

一　月　野沢温泉スキー行

三　月　唐松岳・五龍岳（単独）

三　月　野沢温泉スキー行

三　月　（東京商科大学卒業）

四　月　（浅野セメント㈱入社）

八　月　蓼科山

九　月　小御岳

昭和十三年（二十六才）

一　月　（上野駅発、浅野セメント㈱函館支店へ転勤）

一　月　湯ノ川スキー場スキー行

一　月　七飯スキー場スキー行

二　月　我朗スキー場スキー行

二　月　天狗山（小樽）スキー行

二　月　三角山スキー場スキー行

二　月　春香山スキー場スキー行

二　月　横津スキー行

三　月　ニセコアンヌプリ

三　月　奥手稲・奥無意根

六　月　駒ケ岳・鹿部温泉

八　月　大雪山と小函

（秋）（家業をぐため退社、上京）

昭和十四年（二十七才）

八　月　富士山

十一月　刈寄山

昭和十五年（二十八才）

一　月　飯士山スキー越え

昭和十六年（二十九才）

十二月　乾徳山

昭和十八年（三十一才）

一　月　（応召、三月渡満）

昭和十九年（三十二才）

四　月　（南方へ転進）

○生年　明治四十五年五月四日

○没年　昭和二十年七月十日パラオ島の西南ソンソル島にて戦病死

○日本山岳会入会　昭和十年九月（会員番号一六〇五）

※この山行譜は、部報や針葉樹会報等によって、柿原ひとりで作った。誤りあらば、御訂正ください。

赤谷川本谷溯行

前神　直樹

赤谷川本谷を登ってみたいと思ってからもう何年になるだろうか。やっと今年の夏その思いを遂げた。

山登りを始めてもう何年もたつがいつまでたっても沢登りの面白さというものは変らないようだ。何の変哲もない河原歩きをしてある地点を曲ると予想もしなかったような大きな滝、綺麗な瀞などに出会し、思わず声をあげてしまう、そんな喜び、興奮はやはり沢登りにしかないのではないかと思っている。意外性が全も楽しめるという点が沢登りの真骨頂とするなら、一度登った沢はもうそれほどの魅力を与えてくれない。知らない沢に分け入ることにこそ溯行意欲を掻き立たせてくれる。奥多摩・丹沢あたりから始まった沢登りもだんだんその領域を拡げてきて北アルプス・南アルプス・上越・北海道と、自分にも溯行できそうだと思えるところは数え上げればきりがない。ただ時間におのずと制限される社会人となると、そう遠出もまた長大な沢も簡単には行けない。この八月引地から「今度の土日でどこか行きます？」と電話を受けた時も、「あの沢、この沢」と頭には浮んだが、学生時代から行ってみようと思っていた赤谷川本谷を選ぶのにそう時間はかからなかった。上越が「手頃さ」と「意外性を与えてくれる」という点で沢の宝庫だという感は今も変っていない。

八月七日（土）朝、例によって金曜の夜のアルコールを若干体に残しながら、上越線にて同行の引地（五十五年卒）、小林（五十六年卒）と打合わせ通り会う。あの夏のカーッとした太陽光線はあまり感じないが、天気はまずまず。ガイドブックで予め予備知識は仕入れてあるものの、どんな沢なのだろうかと想像しているとどことなく心は浮き立つ。

水上で上越線を降り、早速猿ケ京から川古温泉目指してタクシーに乗り込む。いつものことながら誰も満足な食料を用意していないから、途中のスーパーマーケットでいろいろ買いこみ、わらじも通りすがりの店でそろえ、十一時川古温泉着。笹穴沢との出会いまではすぐに歩き始めた。ザックの荷物を整えると一応林道が続いていて、最初この林道歩きに嫌気がさすなと思ってはいたものの、三人で馬鹿話しをしているうちに一時間程で出会い着。引地は足首が痛いといってちょっとつらそうだ。固いアスファルト道路でのトレーニングのやりすぎじゃないかと思う。もう十年程前に登った笹穴沢を左に分けて毛渡の越へと続く山道に入る。赤谷川の左岸を巻きながらほぼ平行に山道は奥にのびる。今年の夏の豪雨のためだろう、道を突然大きな木がふさいだりしているが、道そのものはしっかりしている。もう少しで道が赤谷川本谷を渡る地点（つまり本谷溯行開始地点）というところで引地が自分は引き返すという。足首が痛くてたまらず、とても溯行できる状態ではない

と。そう言われると僕らも引返して自宅でごろごろしていようかなという考えが頭を擡げてくるが、ここまで来ていて引返すのはあまりに無駄、やはり今回は溯行しようということになり、一人でも絶対大丈夫という引地を見送って小林と僕は赤谷川の川床に降り立った。午後一時二十分。

さあいよいよ溯行だ。所詮海になんぞは行けない僕らだ、ここで水と遊ばなくてどこでやるんだとばかり、水の中をじゃぶじゃぶと進む。天気はまずまず、ハッとするような滝や瀞にきっと会うだろうと心をときめかして登ってゆく。河原歩きから巨岩がやたら立ちふさがり、自分が迷路にいるような感じのするところを、たまにはショルダーなども使って高度をかせぐ。ガイドブックで大きな滝、マワットノセンや裏越ノセン、ドウドウセンのこともわかってはいたが、まず最初の滝、マワットノ下ノセンの前に出たときは「へーこれか」とやはり口に出た。右岸をたどる。続くマワットノセンも右岸をたどるが、ここは草付の足場が安定せず、滝壺に落ちるかなと、緊張させられる。なおも高度をかせいで、裏越のセンには三時に着いた。なるほど滝の落ちる裏側には、人間がはって通れるくらいの割れ目が水平に入っている。ただ想像していたよりは水量は多くない。予定通りこの滝は裏の溝をはって渡り、右岸にあるルンゼ状のルートをそのまま上に抜ける。そして四時ドウドウセン手前着。このドウドウセンの高巻きルートとなる右岸に入る小沢の出会いの砂地を今宵の幕営地と決め、荷物を置いてドウドウセンの見物に出掛ける。物の本がいう通り、どう頑張ってもこの滝の全貌は見えない。ただ滝壺に残る厖大な残雪と薄気味悪いくらいの青い水が、余程の大きな滝だなと思わせる。

滝見物は早々に切り上げツュルトを張った二人だけの幕営地で、引地が残していったポーランド産ズブウォッカをちびりちびりとやる。これこそ別天地。多少体の方が酔ってくると、心までが陶酔感でどこかに飛んでゆきそうだ。綺麗な沢の水の傍で飯を食ったり酒を飲んだり、暮れてゆく空をながめる一時こそ、沢登りをやめさせない至福の一時なのだろうか。狭いツェルトで熟睡。

明けて翌八日、日曜日、六時十分発。

結局この日の溯行が本谷溯行の白眉だった。まずドウドウセンの高巻きから始まる。高巻きとはいっても滝とは離れた小沢をつめて、小尾根を乗越すだけで、予想していたのとは違い三十分かそこらで終るものだった。藪漕ぎも大したことはない。拍子抜けといったところか。ドウドウセン上流は、うそのような静かな流れで広い河原には、この辺りの沢を集中的に登っている二人のパーティに会う。

ここから三十分も進むと、突然ゴルジュが現われた。まとまったゴルジュだ。これが約二時間程続くのだが、適当な厳張と、岩と水だけで造られた単純さが何ともいえず心を高まらせる。ザイルを使用するところなど格別ないが、かといって慢然として歩けるところでもない。水に浸る機会はこの時しかないとばかり声をあげながら水の中を進んでゆく。落ちたって危険はない。所詮頭まで水につかればいいだけのことだ。へつりへつりの連続

でまたたく間に時間は過ぎる。

楽しい緊張の一時がいつの間にか終ると、急に水量が減ってきて原流の様を呈してくる。もう緑しかない、あの上越稜線は手の届くところまで来ている。嫌な藪漕ぎはもうない。背丈より若干高めの笹の中をぜいぜいいいながら稜線を目指す。辺りがもうガスっているせいでちょっと迷ったが、午後一時には国境稜線の登山道に飛び出した。何度見ても飽ない上越の山並みは何も見えない。しかし稜線上から見る、何の変哲もない赤谷川のどこにあんな面白いゴルジュ帯があったのだろうかと不思議に思える。下半分の大きな滝が四つ程あって、そればかりが有名だけのようだが、それよりも上半分のゴルジュ帯の方がはるかに楽しめる。いくら滝が大きくても、登れなくては意味がない。今度の山行では、休むことを忘れさせるくらいの手頃な難しさと、綺麗な水の流れを見せてくれたゴルジュ帯こそ、最も印象に残った部分だった。

さあ、今度はどの沢に行くかと小林とも話し、心の中でもいろいろアイデアをこねくり回す帰り路は、多少長かったけれど、これまた楽しい一時だった。さあ下でうまいビールを飲もうと、小林と二人駆けるように谷川温泉に急いだ。

「ボチボチ山登りしましょか。」

中西　茂

考えてみると、大学二年の春合宿で遭難してから四年半になってしまいましたが、山へ行こうと思い始めるまで、かなりなブランクがあったように思います。怪我をしてからの学生時代は、何ら熱中することもみつからずにただ漫然と暮してしまったようです。クラブの部会に出席していると、よけい自分がミジメに思えてきてならなかった事が頭の端っこに残っています。たまに同期の連中に一緒に山へ行こうとさそわれもしたけれど、怪我をする前に自分なりのエネルギーを爆発（暴発という方が当っていたかもしれない。）させた山登りをしていたという自負があったが為に、よけいに「ただボンヤリと景色を見に行くような山登りをして何がおもしろい。」という気になって、なんとはなく断わっていました。どうも若干性格がいじけていたようですね。（今でも多分にこういう面は残っているかもしれないけれど。）

そうこうしている内に、大学を卒業して無事に（OBの方々にはかなり御心配をおかけしましたが）商社へ入り込むことができ、半人前の月給とりになりましたが、寮に入って驚いたことは、休みになるとほとんどの人間が寮に残っていないということでした。「ほんまに、みんなどこへ行ってんのや。」てな感じで、最初の頃はびっくりしておりました。ところ、「やっぱし、うちの会社は頭脳採用というよりは、体力採用の人間の方が圧倒的に多いみたいやな。かくいうこの俺も、どっちかというと、後の方としか考えられんし。しかし俺も体力採用やったら、なんかやっと

かんと落ちこぼれてしまうんとちがうかいな。頭のない人間が体力なくしたら、それこそ会社へ行って便所掃除せなあかんようになってしまうで！」てな非常に単純な論理の展開があり、ほな一体何をしようかということになったんですが、さしあたり思いつくものはなし。「ゴルフもぼちぼちやってもいいけれど、あんなもんは暇つぶしで、熱中できそうにないし、金がかかり過ぎる。かといって、ランニングするいうても足がいうことときかんし。ほな、やっぱり山へ行くぐらいしかないやないか。」という単純論理の第二段がありました。

まあ、簡単な仕事をもらえるようになってボチボチ慣れてくるに従い、会社が赤坂にあって夜の方も派手になっていきましたが、（限界点は、すぐ見つかりましたが。）何かしら心の中がスッキリしない。「なんでやろ？結構おもろい生活しているつもりやのに。仕事も、だんだん憶えておもしろくなってきたし。おかしいなあ。」

東京のド真中で一日の大半を費やしている と、しだいに心の中が、うそ寒くなってくる。田舎者の習性なのか、山に対する執着が少しだけでも残っているせいか。旅行に行って、黄金色に輝く広々とした田園風景と、その背後に脈々と息づく山々を見ていると、なんとはなしに目がいきいきとして、満足感にひたっている自分がよくわかります。「やっぱり少しづつでも山に、いやまず田舎でええやろ入っていこう。そうせんと、せちがらい、余裕のない人間になってしまいそうや。」

こう思いはじめたのが去年の秋でした。よし、思いたったが百年目、どっかへザックかついで行くしかないぞ。それにしても、ひとりで行くには、ちょっと足の事が心配だし、寂しいだろうから、誰か気のあった奴と行くのが一番。こう考えてみると、山岳部同期の米田ぐらいがいいだろう。ということで、勝手に決めてしまい、電話すると、あいつのことやから、いやと言う訳はない。さてどこへ行こうか。まあ俺としては、足の具合がどんなもんか見る必要があるし、時間的な制約が強いから、（ほんまに、学生の頃と雲泥の差があります。）まず最初は、日帰りのハイキング程度でええやろということで、行くにはかなり抵抗があったけれど、東京都民の家族ハイキングコースであります　高尾山という ことにしました。当日、山岳部の頃には、雨男として、一部で有名だった私めも、山に対する復帰第一段をみごとに飾ることができました。（非常にいい天気で、当然ハイカーもぞろぞろいまして、多少閉口しましたが。）晴男の米田に感謝致します。

それから、ちょっとハズミがついて、OB山行の上州武尊（この時は、山へは登れないので、快晴の下で、地元の小学生の、距離スキー大会を見ておりました。）ひさかたぶりに氷におおわれた道を、おもいっきり転んで米田とふたり、大笑いした入笠山。（この時は、ほんとに久し振りにシュラフに寝て、いたく感動しました。）会社の友達と春の連休を利用した、裏磐梯。開高健に影響されて、釣りをしたいと思いたち、大学一年の時に遡行し、氷瀑訓練もした、なつかしの奥秩父の東沢。（雨男復活で、ほとんど雨ばっかり。

おまけに学生の頃には、まったく記憶にも残っていないような、出だしのあたりでえらい苦労して、汗はダラダラ、それこそ這うように進んで、結局時間切れでなつかしの乙女の滝も見ずじまい、釣りもできずじまいという散々な目にあって、結局収穫といえば、山の雰囲気を満喫したのと、今の実力を知らされたくらいか。）

まあ、今のところ時間の制約と、金銭面のしがらみにまとわりつかれて、これぐらいしか行っておりませんが、なんとはなく山に対する情熱が少しづつくすぶり始めたようで、自分なりに心の中が浮かれてくるのがわかります。決して無理をしないで、それこそ牛のようにボチボチと山へ向っていくつもりです。そうしている内に、山での歩き方を覚えて、OB山行で皆様と同じような足どりで歩けるようになると思います。今は山のやさしい顔と、怒った顔を交互に見くらべながら、シュラフで寝るだけで満足です。十二月の初めには、いっちょ、またどこかへ行ってやるか。

会務報告

○針葉樹会総会　六月二十三日　於ホテル一橋

出席　三十七名

議題一、五十六年度活動報告

二、五十六年度決算報告および五十七年予算案

三、遭難対策基金報告

四、一橋山岳部五十六年度決算及び五十七年度予算案報告

五、役員改選の件

六、学生インド遭難にかかわる今夏訪印の件

七、その他（山岳部新入部員紹介等）

○懇親山行　十月二十三日

日向山に総勢十五名にて登る。ガスの合い間よりの甲斐駒や周囲の山々の姿は圧観。

参加＝近藤・佐藤政雄・根本・久保・樋口・佐薙・上原・竹中・柏原・金子・前神・佐藤活朗・小林・岡部（4年）・鈴木（1年）

○幹事変更の件

学生担当　引地真→藤本敏行

会報担当　松田重明→小林修

○会員異動

加藤博行（五十一年卒）

勤務先＝〒541 大阪市東区高麗橋五丁目一 ☎大阪（〇六）二〇三ー一九三一 ジャパンライン株式会社大阪支店 北米輸出課

自宅＝〒654 神戸市須磨区潮見台町一ー三ー三〇 ジャパンライン潮見台寮 ☎神戸（〇七八）七三一ー一二二一

引地真（五十五年卒）

勤務先＝日中石油開発株式会社天津鉱業所 塘沽事務所　資材部 中華人民共和国天津市塘沽区 546信箱 ☎塘沽（TANGGU）2128 TELEX 23161 JCOCT CN

自宅＝渤海賓館 中華人民共和国天津市塘沽区 工農新村 ☎塘沽（TANGGU）2750

高崎俊平

自宅＝〒228 相模原市相模大野七ノ三六ノ一ノ五〇九 ☎（〇四二七）四八ー三四三五

昭和５６年度　針葉樹会会計報告および昭和５７年度同会計予算

Ⅰ　昭和５６年度一般会計決算

収　支　計　算　書

（昭和５６年６月１日～昭和５７年５月３１日）

（　　）内は予算額

支　　出	金　　額	収　　入	金　　額
(1) 会報発刊費	354,720 (800,000)	(1) 納入会費	(註1) 1,314,420 (1,193,000)
(2) 山岳部活動補助	200,000 (200,000)	(2) 雑収入	44,283 (7,000)
(3) 通信・連絡費	33,540 (25,000)	(3) 前年度よりの繰越	305,993 (305,993)
(4) 事務費	5,370 (2,000)		
(5) 未支出費用	401,500 (368,140)		
(6) 印刷費	46,000 (—)		
(7) 諸経費	62,550 (21,000)		
(8) 臨時評議会総会経費	97,370 (—)		
遭対基金繰入れ (註2)	66,870 (60,000)		
次年度へ繰越	396,776 (29,853)		
合　計	1,664,696 (1,505,993)	合　計	1,664,696 (1,505,993)

（註１）　ドル小切手にて入金された会費を円転したため。

（註２）　山岳部員加入保険料は一旦遭対基金繰入れとし、遭対基金から保険料を支払うという事務手続きをとっております。

Ⅱ　昭和５７年度一般会計予算

収　支　予　算　書

（昭和５７年６月１日～昭和５８年５月３１日）

支　出	金　額	備　考	収　入	金　額	備　考
会報発刊費	600,000	4回分	納入会費	1,000,000	５７年度未納分の７割および54，55，56の未納分の５割
山岳部活動費補助	250,000		雑収入	4,000	
通信・連絡費	60,000		前年度よりの繰越	396,776	
事務費	30,000				
印刷費	50,000				
名簿印刷費	200,000				
遭対基金繰入	80,000	山岳部員加入保険料			
次年度繰越（予備費）	130,776				
合計	1,400,776		合計	1,400,776	

Ⅲ　昭和５６年度遭難対策基金収支状況

収　支　計　算　書

（昭和５６年６月１日～昭和５７年５月３１日）

支　　出	金　　額	収　　入	金　　額
学生保険料支払い	66,870	新旧割引債買換え差金	28,039
割引債中途解約差損	29,499	普通預金利息収入	6,467
遭対基金追加募集経費	56,690	遭対基金繰り入れ（註2）	66,870
遭対基金積上（現在高）（註1）	2,405,039	遭対基金追加募集（註3）	1,490,000
		前年度末基金残高	966,722
合　　計	2,558,098	合　　計	2,558,098

（註１）　昭和５７年５月末の遭難対策基金残高　　2,405,039円　は現在、東京銀行普通預金口座にて管理中。

（註２）　学生部保険料支払のため

（註３）　昭和５７年５月末現在、１１３名の方から合計１６３口（１６３万円）の遭難対策基金追加応募がございましたが、このうち、これまでに同基金口座に入金された金額が１４９万円となっております。
なお、追加募金につきましては、５７年内まで期日を延長して継続いたしております。

Ⅳ　昭和５７年度遭難対策基金収支見込

収　支　予　算　書

（昭和５７年６月１日～昭和５８年５月３１日）

支　　出	金　　額	収　　入	金　　額
学生保険料支払い	80,000	遭対基金繰入	80,000
遭対基金積上	2,658,039	遭対基金追加募集未入金分	140,000
		普通預金利息（400千円）	7,000
		割引債償還利息（2,000千円）	106,000
		前年度末基金残高	2,405,039
	2,738,039		2,738,039

従って昭和５８年５月末の遭難対策基金は　2,658,039 円となる見込。

《備　考》　当年度中以下の方々より当会宛御寄付がございました。

萬濃　誠三　様	150,000	
土方　　晋　様	150,000	
中村　宜興　様	150,000	（＋
計	450,000	

以上は遭難対策基金口座に仮入金しております。

ホワイト・セール隊捜索活動関連収支決算

（昭和５６年９月２６日～昭和５７年９月３０日）

本会計につきまして概説いたしますと、昭和５６年夏および５７年夏の２回のインド国内捜索活動に係る諸経費および本邦内諸経費は、合わせて総額約９８０万円（9,826,206円）となりました。これに対しまして保険金等による収入は総額約2,210万円（22,095,159円）で、差し引き約1,230万円（12,268,953円）が残り、この残額のうち追悼集作成費として概算約１００万円（1,000,953円）をとりおき、残る約11,30万円（11,268,000円）を三御家族に均等返済いたし本会計を整理させていただきました。

尚、追悼集作成費として用意いたしました約１００万円のうち、もし残余が発生いたしました場合は、三御家族の御了承のもと、針葉樹会遭難対策基金に繰り入れさせていただきます。

収　支　決　算

（昭和５６年９月２６日～昭和５７年９月３０日）

（金額単位：円）

収入		支出	
保険金	21,184,850	航空運賃	3,047,400
雑収入	424,226	通信費	540,000
受取利息	486,083	国内諸経費	1,338,061
		国外諸経費	4,900,745
		三御家族への返還金	11,268,000
		追悼集作成費	1,000,953
	22,095,159		22,095,159

《収入明細》

イ．保険金

死亡保険金	15,000,000
ヘリコプター代金等捜索費保険金	6,184,850
小計	21,184,850

ロ．雑収入

遠征隊に対するカンパ未収金	100,000
航空券キャンセル	210,000
会員外寄附	40,000
為替差益	74,226
小　　計	424,226

ハ．受取利息

中期国債ファンド口	480,948
東銀普通預金利息口	5,135
小　　計	486,083

《支出明細》

イ．航空運賃

インド往復分	3,047,400

ロ．通信費

国際電話／電報	510,300
国内電話／電報	29,700
小　　計	540,000

ハ．国内諸経費

仮報告書印刷／発送費	170,000
捜索隊食料／装備費	173,260
同　保険料	96,180
寄贈品費	494,900
レリーフ代	90,000
写真現像／コピー代	134,400
国内交通費	161,240
事　務　費	18,081
小　　計	1,338,061

ニ．国外諸経費

① 派遣費	交　通　費（Rs 16,410）	451,280
	宿　泊　費（Rs 19,519）	536,774
	食事他雑費（Rs 5,456）	150,044
	遠征隊未払代金（ポーター代リエゾン）（Rs 7,600）	208,974
	福永氏へ御礼（Rs 4,500）	126,000
	マハビル・シャルマ両氏へ謝礼（$100）	25,605
	小　　計	1,498,677
②ヘリコプター代金	ヘリコプター代金	3,402,068
①＋②	小　　計	4,900,745

ホ．三御家族への返還金

中　村　様	3,756,000
土　方　様	3,756,000
萬　濃　様	3,756,000
小　　計	11,268,000
ヘ．追悼集作成費	1,000,953

3. その他会計附注

イ．御三家族から山岳部宛御寄附（１５万円ずつ、計４５万円）をいただきましたが、山岳部活動費（報告書作成、図書充実等）にあてさせていただきたく、部の管理会計に移金いたしましたので本会計には含まれておりません。

ロ．１０月１日以降の受取利息は本決算外ですが、勝手ながら便宜上、追悼集作成費会計に計上させていただきます。

※　尚、遭難対策委員会（倉知委員長）は、昭和５７年１０月５日付をもって解散致し

編集後記

今号より松田氏から会報担当を引き継ぎました。

読むには楽しいこんな小さな会報が、作るにはこんな大変なものとは思いませんでした。

× × ×

冬が、雪が近づけば心と体になんとなく力みなぎるのはやはり我々が永遠に山岳部員であることの証でしょうか。

皆様の冬山・スキーのお便りをお待ちします。